Maebashi Biennale 2026 ／ 地域協働プログラム

ARKHENODE

移動式公開編集会議「アルケノード」

2026.06.20 sat

非売品
立読専用



第二回簡易記録

建築家と飲食店、それぞれが見るまちなか

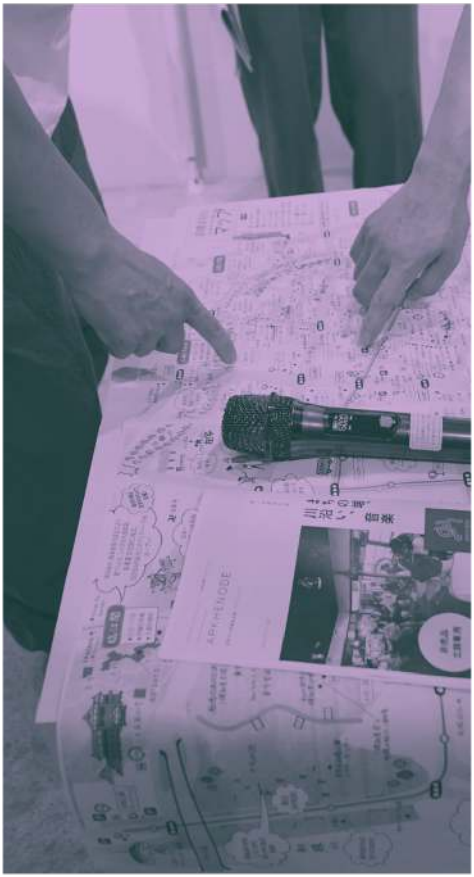


ARKHE NODE
editorial committee

二〇二六年六月二十日、土曜日。あいにくの雨のなか、移動式公開編集会議「ARKHENODE（アルケノード）」の第二回が開かれた。

午後三時、本屋水紋の二階に集まった参加者で、機材を積んだ屋台を引いて前橋まちなかを歩いた。最後にたどり着いた千代田町の「夜家」で、三人のゲストの話を聞いた。

ゲストは、AANE（一級建築士事務所）・IINE（不動産会社）の木暮勇斗さん、新井裕作さん。そして、ラフコーヒーで店に立ちながらHazumiとして複数の場所を運営している玉橋南実さん。テーマは「建築家と飲食店、それぞれが見るまちなか」。



ARKHENODE とは

ARKHENODE — 前橋国際芸術祭2026の地域協働プログラムのひとつ。まちで活動するひと・店をゲストに、屋台を引いて街を歩き、そのあと公開取材の形でトークを開催。
半年分の記録は、来春に一冊のZINEに仕立て上げる。



まち歩き

ACT 01 — ARKHĒ

arkhē — 始まり・根源



雨のなか、本屋水紋から屋台を引いて出発。雨具や傘の用意を呼びかけながら中央通りへ向かう。一回目と同様、引き手を交代しながら進む。

偶然通りかかったショコラティエのアイカさん、中央通り商店街の伊藤理事長も合流し、ともに屋台を引いた。



「腰のあたりに固定できると安定する」など、引き方のコツも自然と共有されていく。

雨が強くなってきたので、前回に続き hengeni、そして隣に位置するギャラリースペース diff で十分ほど休憩。雨の日には、雨の日特有の街の姿があることに気付かされる。







ゲストの木暮さん、新井さんの新たな拠点（工事中）にも立ち寄って、中を少し見学。

XXXXXX（ここに解説を入れたい）

道路の段差や、雨で滑りやすくなった路面に気をつけながら、夜家にゴール。屋台についている湿度計は八十〜九十パーセント手前を指していた。





ACT 02 — NODE

公開取材

node — つながり・節

GUEST 01

木暮勇斗

AANE／IINE



▼大学三年、弁天通りで一軒家を改装する

前橋工科大学三年生のときに、弁天通りの裏側の一軒家を自分で改装して住んだ。これが今、建築の道に進むきっかけになっていて、新井さんともこのタイミングで出会う。

「建築について、大学で勉強していた一方で、すごく遠い存在として感じていたんですよね。でも実際にＤＩＹをすることによって『建築って自分でもできるんだ』みたいに距離が縮まった」

ＤＩＹ素人の手で作った空間だったが、いろんな人が集まる場所になった。

「その頃は、街には若者がほぼいなかったので、大人たちも面白がってくれていた。僕も『面白い大人がいるな』と感じて。まちなかをより好きになった」

「AANE」は一級建築士事務所、「IINE」は不動産会社。それぞれ独立して活動していた同世代が合流して設立。店舗、新築住宅、リノベーション等を手掛ける。

前橋まちなかには、AANE／IINE、そして個人事業主時の屋号であるllemo design studioのいずれかで関わった物件がいくつも存在する。現在はベトナムにも事務所とスタジオスペースをかまえ、日系企業の飲食店の設計等も行なっている。

▼就職後も、まちを面白がる

次に移ったのが、銀座通り裏の「丸山ビル」。二階に住みながら、一階をレンタルリビングとして開いていた。

就職は高崎の設備会社で現場監督を二年。その後、高崎の工務店と設計事務所でダブルワークを四年。その間も場所をつくり続け、表現することを続けていた。

▼最初の設計

最初の個人の設計案件は、馬場川沿いにある喫茶「マルカ」。独立してすぐに望月書店（現・はるぱん）を取得し、自ら資金を調達し、事務所や店に変える機会があった。前橋工科大の研究室の学生と一緒に設計しながら、学生が店主にプレゼンするような場をもうけた。

「場所ができていく過程も地域の人に開いて、完成の手前の段階で関係をつくっていく、みたいなことは、無意識にしてましたね」

GUEST 02

新井裕作

AANE／IINE



▼倉渕町、空き家への憧れ

出身は高崎市倉渕町、もとは村だった田舎町。中学校の通学路に、昔のフォトスタジオだった建物があった。空き家になっていたが、「すごい可愛い建物で大好きだった」。自分のものになったら面白いな、と妄想していた。小さいころから古い建物への関心があった。

父親の影響で音楽が好きになり、中学の職場体験で建築デザイン事務所に行った。「小さい頃の本当に一番小さい時は大工さんになりたくて、その後、建築をデザインする人っていう夢に変わっていった」



▼高崎で、リノベーションに出会う

高崎の街がリノベーションで盛り上がりを見せ始めた頃に、木暮さんと出会った。

「僕はあんまり自分から人を誘うタイプじゃないんですけど、木暮はいつでも僕を遊びに誘ってくれたんですよね。街に場所を持って、そこを拠点にして街に遊びに行く面白さみたいなものを、木暮から学びました」



▼「まちが喜んでる」感覚

中学のころの職場体験でお世話になったＦＬＯＷ建築デザイン事務所の佐藤さんらが運営している高崎のまちづくり会社「まちごと屋」。そこで高崎本町エリアのイベントの運営に関わった経験が、その後の人生に大きく影響している。

「まちが喜んでる、みたいな感覚を得られた。だから、建築でも不動産でも、こういう感覚を大事に掘り下げていけたらなと思ってます」



GUEST 03

玉橋南実

Hazumi

▼東村、神奈川の大学

出身は群馬県東吾妻郡東吾妻町、もとは「東村」だった。日本の名水百選に選ばれている「箱島湧水」が近くにある場所。

田舎を出たくて、大学は神奈川県藤沢市にした。小さいころから食べ物が好きで、食に携わる仕事に就きたかった。母が厳しく「資格が取れる大学に行け」と言ったので、管理栄養士の養成校を選んだ。

▼管理栄養士とネズミ研究

神奈川県の大学に進学。大学では管理栄養士を目指しながらネズミの研究をしていた。

「研究室の社会人に混ざって実験をしながら、管理栄養士の勉強もした一年間でした」。国家試験は無事に通過し、卒業。



▼豆腐からコーヒーへ

群馬に戻り、日本トップシェアの豆腐メーカーに就職。工場勤務、品質保証部と勤務したのち、「作ったもののリアクションを生で受け取りたい」という思いから飲食店への転職を決めた。

太田市のコーヒー店「FUIGO」等で修行を積み、前橋のまちなかにも顔を出す中、ラフコーヒー（Hazumiが運営するコーヒースタンド）のオーナー・神戸さんからの「ラフコーヒーの夜を活用したい」というメッセージを受け、二〇二三年六月、悠凪（ラフコーヒーで毎週金曜の夜に開くカフェ）を始めることが決まった。その流れでラフコーヒーにジョイン。

▼まどかとWillow Popcorn

「自分でも料理ができる場所をやりたい」と話していたら、べにや（弁天通りの宿）の話を聞いてこの場所でやりたいと思った。まどかの内装を、玉橋さんと木暮さんで相談しながら形にした。朝食の店と夜の居酒屋として営んだ場所で、「いいお店になったし自走もしていた。また年を取ったらやりたい」と振り返る。

二〇二五年十月からは、ポップコーンブランドWillow PopcornをHazumiで引き継いだ。

「これがフックになって、『前橋、面白いお店あるじゃん』と言ってくれる人が結構いる。前橋という名前が外に広がるきっかけにもなるブランドに育っています」

Q　三人それぞれの話を聞いて、どうでしたか？

新井　いつもお互い気軽に話すけど、こんな深い話をすることはないので、めっちゃいいなって思いました。たまちゃんがラフコーヒーや悠凪みたいな場所で、なんであいうことをやっているのか、今までどういう人生を歩んできたのか、その背景を初めて知りました。前橋のまちなかに来てる人たちって、全員が全員、前橋出身というわけじゃない。たまちゃんも、田中さんも、僕も。**それぞれ違う人生で学んできて、いま前橋に向いて活動してる**。そういうルーツの話を、もっといろんな人から聞きたいと思いました。



Q　前橋ってどんなまち？

木暮　活動のエリアで市町村間の垣根はないですが、あえて表現するなら「**前橋は濃い**」っていうイメージがありますね。一人ひとりのお客さんとの関係や、店ができる過程が濃くて、ファンがつくと強い店になる。そういう人がいるからこそ、僕らは前橋を拠点に設計事務所をやって、飲食店や建築を通して自己表現をしたい人のサポートができればと思っています。

田中（アルケノード）　前橋の店は、プロセスを大事にしてるから、作る前の段階から情報発信していることも多いですよね。狭いエリアで起こってることがたくさんある。一方で、**登場人物が増えてきて、深い話をしづらくなっている**、という現状もある。いつもよく話すけど、知らないことがたくさんある……そういう状況なんだと感じています。







Q　ラフコーヒーで
お客と話すときに、気をつけていることは？

玉橋　ラフコーヒーはオープンな場所で、いろんな人が来ます。常連さんやまちなかに関係している人は二、三割で、新規のお客さんも本当にたくさん来る。だから**なるべくフェアな立場で話をする**ように心がけています。「まちなか、大好きでたまんないんです」っていうスタンスで行くと引かれちゃうこともあるので、自分の熱量を慎重に伝える、ということを意識しています。

田中（アルケノード）　学校では教えてもらえないようなスキルだね。

玉橋　飲食店業界に入ったから身についたことですね。ラフコーヒーに入る前に働いていたFUIGOのオーナーから、「お客さんをよく観察してしっかり対応するように」と教え込まれたので。





Q　一日暇があったら、
まちなかでどう過ごしたい？

新井　diffに行きたいですね。浅見さんや猪俣さんに会って、仕事の話もそれ以外の話もして、煙草を吸ってる時間も楽しい。それを始めたらあっという間に二時間半くらい経つ。そしてGRASSAに行って、たくさん食べて、お酒を飲んで、いい感じになってきたら裏弁天に戻って、会った友達と飲んで喋りたい。

木暮　diffは展示やってる時は毎回行きたい。歩いてRKのナウサに行って、GRASSAかみやたやでご飯食べ、お酒を飲んで、広瀬川で休みます。

玉橋　本を読むのが好きなんですけど、街中だと人との距離が近いお店が多くて、会話しちゃって本を開けないみたいなことがあるんですよね。だから本を読むなら、まず本屋水紋かhengeniに行って、その日に読む本を買って、広瀬川で読みたい。五月くらいの、晴れている日に。昼から夕方にかけて本を読んで、暗くなってきたらCASA FRESCOに行って、ワイン飲みたい。で、帰って寝ます。

Q　シーズン二のゲスト・指出一正氏（ソトコト編集長）が、
まちへの関わり方として「いる、なる、する」という段階があると書いていた。
三人がまち「いる」という状態から「なる」「する」に踏み出したきっかけは？

木暮　建築家の人は建築家になってからまちに関わる人が多いんですが、僕の場合は、街に居たから建築に興味を持って、建築家になることができた。**まちが建築家にしてくれた感覚**。「いる」からスタートしているのが特徴かなと思っている。「なる、する」のタイミングは、田中さんと出会った丸山ビル一階で不特定多数の人と関わる、みたいなところが「なる」のタイミング。そこから自分たちで物件を取得して場所を作って、次の人に受け継がれていくことや、自分で商店街で民泊などを初めてからが「する」がはじまってる気がする。これからもまちに「いる」建築家でありたい。

新井　直接的に前橋で仕事をするようになったきっかけは木暮なんですけど、その選択に乗ったのは、バンド的な考え方から。**バンドも「いる、なる、する」なんですよ**。見に行って、自分もやりたくなってステージに立ち、最終的には自分で企画してアーティストを呼んでイベントをやる。そこで「する」になる。ツアーもそう。自分で考えて、ＤＩＹ的に自力で作っていくみたいなことに憧れがあった。

玉橋　「いる」のきっかけはラフコーヒー、というか神戸くん。覚えていてくれたのが一番大きい。居心地が良くて、「いる」機会が増えて、そこから悠凪が始まる。「なる」「する」的な活動は、そこから始まりました。**私もプレイヤーとして誰かの「いる」きっかけになれる人になりたい**、というのはずっと考えていることで、お客さんとの関わり方、人との関わり方で、すごく気をつけていることでもあります。


PUNCHLINE
前橋は、
〝文化の匂い〟がする。
好きの一点突破。





前橋国際芸術祭2026 - 地域協働プログラム
ARKHENODE
2026.06.20（土）第2回 簡易記録
制作：市根井直規

ゲスト
木暮勇斗（AANE／IINE）
新井裕作（AANE／IINE）
玉橋南実（Hazumi）

アルケノード編集委員会
田中隆太（企画）
寺澤由樹（デザイン）
市根井直規（編集）

Instagram：@arkhenode

アルケノード Season 1

まちを耕す地元のひと・店と。

6/13（土）　第1回　まちの端、川沿い、音楽
Guest：近藤康裕（グルマンカレー）、MEG（MEGREM studio）

6/20（土）第2回　建築家と飲食店、それぞれが見るまちなか
Guest：木暮勇斗・新井裕作（AANE/IINE）、玉橋南実（Hazumi）

7/4（土）第3回　学生の頃からまちなかに関わるふたり
Guest：竹内躍人（ルルルなビール）、岡田友大（Maebashi Works）

7/18（土）第4回　裏弁天の逆襲
Guest：金山慎太郎・金山杏菜（hengeni）、野口泰平（CASA FRESCO）

2026年6月〜7月開催　全4回
時間　15:00〜18:30

Instagram @arkhenode